

パリのエスプリ

佐伯祐三と佐野繁次郎展

会 期：2007年4月7日(土)～5月20日(日)

休 館 日：月曜日(ただし4月30日は開館)、5月1日(火)

開館時間：午前9時30分～午後5時 (入場は午後4時30分まで)

観 覧 料：一般1000(900)円 20歳未満・学生850(750)円 65歳以上500円

()内は20名以上の団体料金です。高校生以下の方、障害者の方は無料です。

会 場：神奈川県立近代美術館 葉山

〒240-0111 神奈川県三浦郡葉山町一色2208-1 tel.046-875-2800

主 催：神奈川県立近代美術館

特別協力：大阪市立近代美術館建設準備室

洋画家佐伯祐三(1898-1928)と佐野繁次郎(1900-1987)は、ともに大阪に生まれ、大阪で青春時代を過ごしました。佐伯祐三といえば、パリの下町を激しい筆遣いで、時にはやさしく抒情的に描き出した風景を得意とした画家として知られています。強烈な個性でパリの街の雰囲気を探り取った佐伯祐三は、そのフランスという風土に魅せられ、次々と傑作を生み出していきました。そして、描くごとに、その絵の中に壁だったりポスターだったりしますが、文字が書かれていきます。文字が文字として書かれているだけではなく、さらに、文字が絵画化されていくのです。では文字は、完全に絵画の一部になってしまったのかというところではありません。ぎりぎりのところで何かを伝えようとしているのです。今回の展示の見所のひとつは、そうした文字の絵画化をわれわれはどのように解釈すればよいか鑑賞者の皆さんと一緒に考えてみようという点にあります。

ところで、もうひとりの画家佐野繁次郎は、佐伯祐三と出会うことで、画家になったことが知られています。二人が大阪から東京に出てきてからも交友は続いていたことも確認されています。ただ、すぐに、佐伯祐三がフランスに渡り、30歳の若さで病死したのに対し、佐野繁次郎は絵を描きながら、文学にも手を染め、どちらの道を進むか悩み、その後、本格的な絵画活動をスタートさせることとなります。それゆえ、いままで二人の芸術についてかかわりを持たせて考えることがほとんどありませんでした。しかし、二人の絵画作品に見られる文字の絵画的な扱いについては深いかかわりがあるように思われます。佐伯祐三の絵画芸術における文字の重要性は画面を見ても明らかです。その、強烈な印象を、佐野繁次郎は、佐伯の作品を通して、肌で感じ取ったことでしょう。佐伯祐三が亡くなったときに佐野繁次郎は追悼文を書いています。その文章からもその文字をうまく使った絵画から音楽性のある絵画を見出しています。実際に青年時代の付き合いを調査しながら、二人に見られる文字の絵画的な表現が、彼らの芸術作品にどのような意味を持っていたのか、この展覧会を通して、考察してみたいと思います。もちろん、共通性を探求するとともに、また、二人が別の道を究めようとしたことも明らかにしようと思います。日本近代洋画における文学や文字との親近性を垣間見ることにより、われわれが、美術は美術、文学は文学と区別をするのではなく、総合的な視野に立って芸術を生み出し、それらを享受しようとしていることを再認識してみようと思います。そこからさらに、昭和の絵画において、絵画作品のなかの文字の視覚的効果についてさらに熟考できれば幸いです。

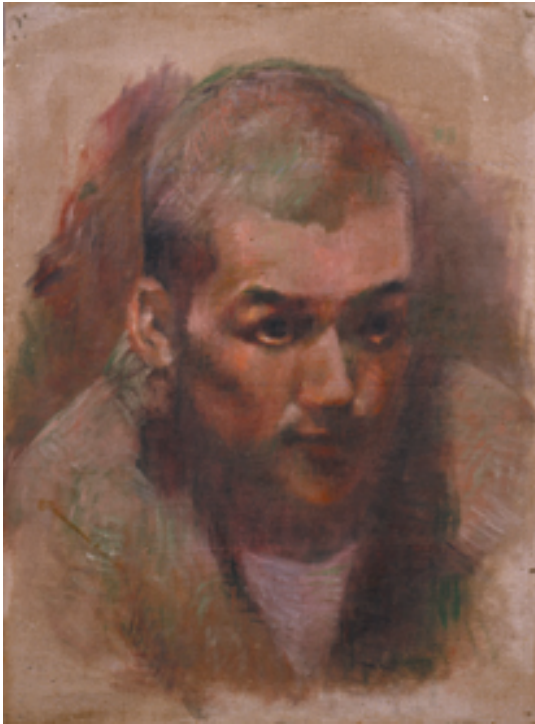
■ギャラリートーク 4月18日(水)／5月16日(水) 各日とも午後2時から

美術館ホームページに掲載される下記のプレス情報をご覧ください。
http://www.moma.pref.kanagawa.jp/museum/press/2007r_saeki_sano.pdf

お問い合わせ先 神奈川県立近代美術館 葉山 〒240-0111 神奈川県三浦郡葉山町一色2208-1
tel.046-875-2800 / fax.046-875-2968 広報担当：忌部 展覧会担当：橋
<http://www.moma.pref.kanagawa.jp/museum/>

佐伯祐三

1. 《自画像》 1917年頃 愛知県立美術館
2. 《広告のある門》 1925年 和歌山県立美術館
3. 《パストールのガード》 1925年
神奈川県立近代美術館寄託



1.



2.



3.

佐野繁次郎

4. 《画家の肖像(死んだ画家)》 1959年(64年加筆)
神奈川県立近代美術館
5. 《赤い十字架B》 1970年 神奈川県立近代美術館
6. 《パリの街頭スケッチ》 制作年不詳 神奈川県立近代美術館
7. 装丁本《辻静雄 パリの居酒屋(びすとろ)》 柴田書店刊 1971年
神奈川県立近代美術館



4.



5.



6.



7.